



Platelet Aggregability as a Predictor of Restenosis Following Carotid Endarterectomy

著者名	望月 悠一
発行年	2019-04-19
URL	http://hdl.handle.net/10470/00032484

主論文の要旨

Platelet Aggregability as a Predictor of Restenosis Following Carotid Endarterectomy.

(頚動脈内膜剥離術後の再狭窄予防における血小板凝集能抑制の有用性)

東京女子医科大学脳神経外科学講座

(指導：川俣 貴一教授)

望月 悠一

Journal of Stroke and Cerebrovascular Diseases.

2018 Nov 29. pii: S1052-3057(18)30648-7.

doi: 10.1016/j.jstrokecerebrovasdis.2018.11.010.に掲載

【要旨】

頚動脈内膜剥離術(CEA)術前後に抗血小板薬が投与されるが、再狭窄の予防効果は不明な点が多い。CEA術後の再狭窄と血小板凝集能の関係について後方視的に検証を行った。2013年5月～2015年3月に当院でCEAを施行した36例を対象とした。再狭窄の定義は頚動脈エコーでECST50%以上または収縮期最高血流速度(PSV)150cm/sec以上とした。血小板凝集能は、集面積解析法(HEMA TRACER 313M, LMS)を用い、二濃度法(collagen; 0.25 μ g/ml・2.0 μ g/ml)を用いた。血小板凝集能判定法(NSR-II)を用いて凝集曲線下面積9クラス分類した。当院ではオリジナルのソフト(modified NSR-II)を用いてそれぞれのクラスを更に10段階へ分け10-99の90段階の分類を用いた。ROC曲線からcut-off値を49とし、49以上は凝集能スコア高値群、48以下は凝集能スコア低値群と2群にわけた。36症例中10症例(28%)に再狭窄を認めた。再狭窄は、低値群では22症例中3症例(13%)に、高値群では14症例中7症例(50%)に認め、低値群で有意に再狭窄が少なかった($P=0.0176$ 、 $OR=6.34$)。抗血小板薬による血小板凝集能の抑制はCEA術後の再狭窄予防に有用であり、血小板凝集能のモニタリングは抗血小板薬の至適容量の決定に有用であることが示唆された。